

論 文 内 容 要 旨

口腔機能低下症と体組成の関連性に関する研究
—低栄養と関連する口腔検査項目の確定—

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

顎咬合機能回復学分野 野澤 一郎太

(指 導： 玉置 勝司 教授)

論文内容要旨

超高齢社会を迎えた本邦において健康寿命の延伸は個人の QOL の低下防止と社会的負担の軽減の観点からも重要課題である。高齢期に生理的予備能が低下することで生活機能障害や要介護状態などの転機に陥りやすい状態であり、フレイルを早期発見し適切に介入することで生活機能の維持・向上を図ることが健康寿命の延伸のために重要であると考えられている。また、歯科医療において、口腔機能の維持は高齢者の栄養状態、身体の状態に寄与すると言われており、口腔機能低下症を早期に検出し対応することで、超高齢社会における健康長寿の延伸に繋がる重要な責務を担う可能性が指摘されている。一方、低栄養とは身体の活動に必要なエネルギーが不足している状態を示し、Global Leadership Initiative on Malnutrition (GLIM)基準では低栄養の定義として、表現型(体重減少, 低 BMI, 筋肉量減少)と病因型(食物摂取不足, 炎症及び疾病負荷)の項目で、少なくとも1つでも該当した場合を栄養不良(低栄養)と定義している。これまでに、施設入所高齢者、要介護高齢者において補綴処置や適切な食事介助法は栄養改善に繋がり、舌運動機能、口唇閉鎖力は栄養状態と関連性があることが報告されているが、口腔機能低下症の検査項目と低栄養と関連する報告は少ない。

本論文「口腔機能低下症と体組成の関連性に関する研究－低栄養と関連する口腔検査項目の確定－」は、本研究は2017年12月から2020年9月までの神奈川歯科大学病院医科歯科連携センターに来院し研究同意を得られた口腔機能低下症判定可能な50～89歳で検査項目の欠損値がない研究協力者117名について低栄養の評価項目として、簡易計測が可能である体組成を用い、これと口腔機能低下症検査項目との関連を適切な統計学的手法を用いて検討している。その結果、咬合力検査および舌圧検査は低栄養状態の推定が可能であることが示唆された。